

阿久遺跡

(第9次発掘調査)

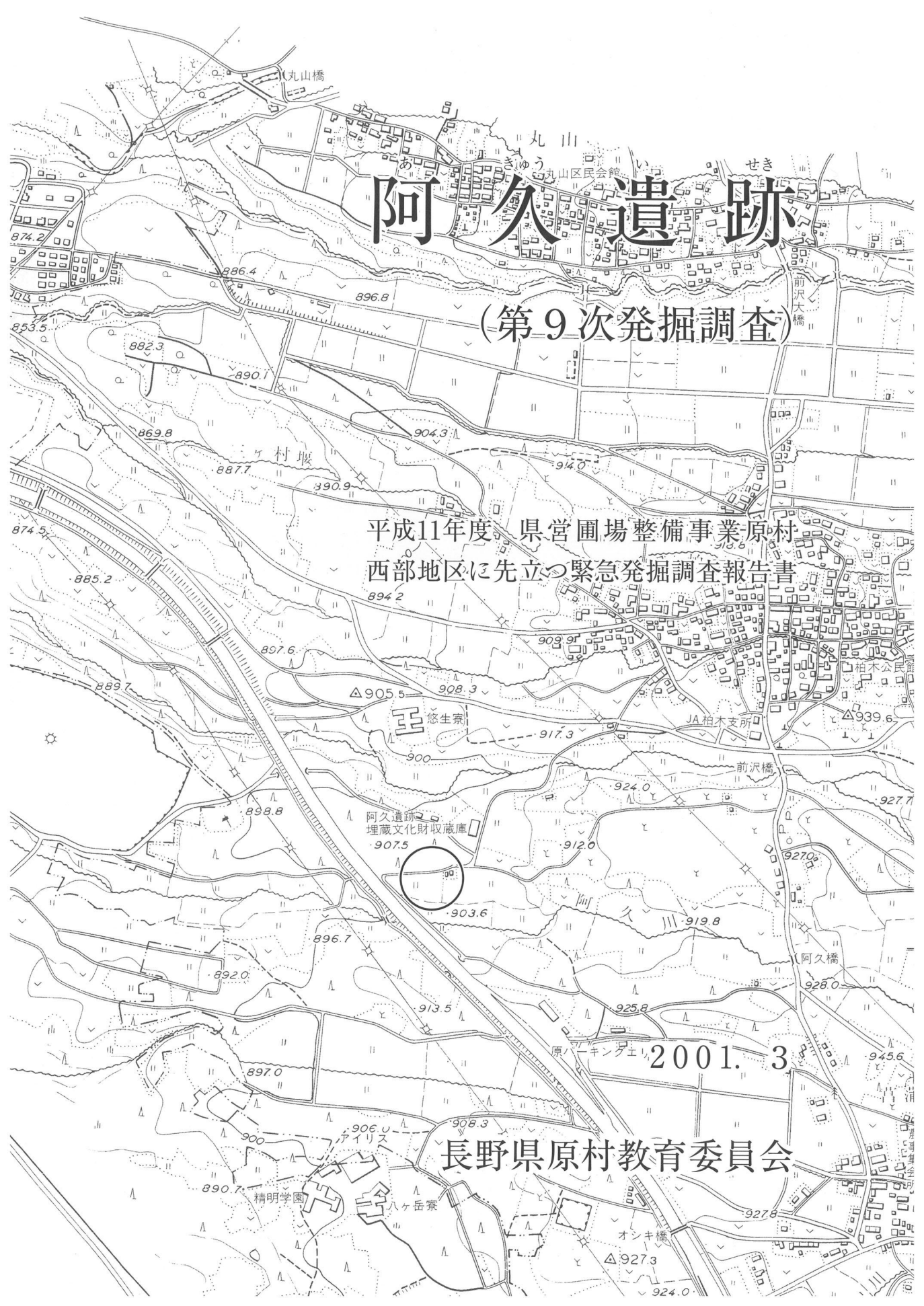
平成11年度 県営圃場整備事業原村
西部地区に先立の緊急発掘調査報告書

阿久遺跡
埋蔵文化財収蔵庫



2001. 3

長野県原村教育委員会



表紙地図10,000分の1 ○印が阿久遺跡

序

八ヶ岳山麓西麓に位置する原村では、村の基幹産業である農業の合理化と生産性向上が求められ、県営圃場整備事業が大規模に進められております。

一方、八ヶ岳西南麓は遺跡の宝庫であり縄文のふるさととして、全国的にも注目されているところであり、本村の阿久遺跡は昭和54年に国史跡に指定されました。

このたび、平成11年度県営圃場整備事業原村西部地区に先立ち、諏訪地方事務所の委託、国庫・県費からの補助金の交付を受けた原村教育委員会が実施した阿久遺跡第9次発掘調査の報告書を刊行することになりました。

国史跡の阿久遺跡は、縄文時代前期の大祭祀場・集落址があまりにも著名ですが、本調査は国史跡から外れた遺跡の外縁部の調査でしたが、平安時代の住居址を数多く検出したことを驚いています。調査地はすでに工事で消滅してしまいましたが、当地方の平安時代解明にむけての資料を提示することができるものと思っています。

今回の調査にあたり、諏訪地方事務所土地改良課各位、柏木区および同地区実行委員会各位、地元地権者の方々のご理解・ご協力、長野県教育委員会のご指導、長野県埋蔵文化財センターをはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、長野県埋蔵文化財センター 調査研究員 櫻井秀雄氏の多大のご助力、そして炎天下でご苦勞された作業員の皆様により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申しあげ、序といたします。

平成13年3月

原村教育委員会
教育長 大 舘 宏

例 言

- 1 本書は「平成11年度県営圃場整備事業原村西部地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する阿久遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫及び県費から発掘調査費補助金交付を受けた原村教育委員会が、平成11年4月19日から11月26日にかけて実施した。整理作業は、平成12年1月17日から3月24日、平成12年12月1日から平成13年3月26日まで行った。
- 3 発掘調査の現場における遺構等の実測・記録は櫻井秀雄の指導のもと、小林りえ、進藤郁代、津金喜美子が行い、写真撮影は櫻井が行った。
- 4 測量基準点設置及び航空撮影・測量、遺構測量の一部については(株)写真測図研究所に、土器の実測・トレースの一部は株式会社シン技術コンサルに、石器の実測・トレース・属性表は株式会社アルカにそれぞれ委託した。
- 5 遺構図における網点スクリーントーンは焼土を示している。
- 6 本書の執筆は櫻井、平出、(株)アルカ 角張淳一が行った。
- 7 本調査の出土遺物、記録類はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、阿久遺跡=11の原村遺跡番号を表記してある。
- 8 発掘調査から報告書作成にわたって、県文化財・生涯学習課の原明芳指導主事、県埋蔵文化財センターの百瀬長秀氏・白居直之氏・鳥羽秀継氏、県立歴史館の白沢勝彦氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

例言・目次

- I 発掘調査に至る経過
 - II 発掘調査の経過（抄）
 - III 遺跡の位置と環境
 - IV グリッド設定・土層・調査方法
 - V 遺構と遺物
 - VI まとめ
- 参考文献
報告書抄録
調査組織

I 発掘調査に至る経過

平成5年度から実施されている「県営圃場整備事業原村西部地区」も7年目をむかえた。平成11年度に事業の対象となる白ヶ原南・前沢・阿久の3遺跡の保護については、平成10年10月27日および平成11年1月27日に行われた「県営圃場整備事業原村西部地区にかかわる埋蔵文化財保護協議」で協議された。出席者は長野県教育委員会文化財保護課（平成11年4月より文化財・生涯学習課）、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会である。

遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいことであるが、原村の農業の将来を考えると農地の整備は必要なことであり、また、村民からの強い要望もあり協議の結果次善の策として「記録保存やむなき」との考えに落ちつき、平成11・12年の2ヶ年にわたり緊急発掘調査を実施し記録保存をはかる方向で同意をみることができた。

調査対象地は広く平成11年度は中央自動車道より東、12年度は西の調査を計画した。

原村教育委員会は、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託と、国庫および県費から発掘調査補助金交付を受けて、平成11年4月19日から11月26日にわたり阿久遺跡第9次緊急発掘調査を実施した。

II 発掘調査の経過（抄）

調査の対象は、国史跡を取り囲む遺跡の外縁部の広範囲にわたり、便宜的に① 南斜面と史跡東尾根上、② 北斜面、③ 中央自動車道西（平成12年調査予定地の確認調査）の3地点に分けて調査を進めた。したがって、その調査地点別に経過を記しておきたい。

① 南斜面と史跡東尾根上

平成11年4月19日 発掘準備をはじめる。

7月6日 草刈り、調査トレンチの設定を行い、重機によるトレンチ掘りをはじめる。

9日 住居址の埋没を確認したため、重機による表土剥ぎをはじめる。

19日 遺構の検出作業をはじめる。

8月6日 竪穴住居址の精査をはじめる。

10日 第102号竪穴住居址より大量の炭化材が出土し、とりあげに苦慮する。

20日 第102号竪穴住居址出土炭化材の取扱いについて、県埋蔵文化財センター白居直之氏に指導を受ける。

9月3日 第102号竪穴住居址出土炭化材の取り上げ保存処理について、県立歴史館白沢勝彦氏に指導を受ける。

- 9日 重機による表土剥ぎは本日で終了する。
- 10月4日 第102号竪穴住居址出土炭化材の保存処理と取り上げをはじめ。
- 10月22日 第102号竪穴住居址出土炭化材の鑑定を県埋蔵文化財センター臼居氏にお願いする。
- 11月18日 ラジコンヘリによる空撮・空測を実施する。
- 12月17日 全ての作業が終り、平成11年度の調査は終了する。
- ② 北斜面
- 9月26日 調査トレンチの設定、重機によるトレンチ掘り、トレンチ内の精査を人力で行うが、遺構を確認するまでに至らない。北斜面の調査は終了する。
- ③ 中央自動車道西（平成12年調査予定地の確認調査）
- 10月16日 遺構の埋没状況確認のため、調査トレンチの設定を行い、重機によるトレンチ掘りをはじめ。縄文時代の土器破片、乳棒状石斧、黒曜石の剥片、平安時代の土師器破片の発見がある。
- 25日 重機によるトレンチ掘り、トレンチ内の精査は終了する。

Ⅲ 遺跡の位置と環境

阿久遺跡（原村遺跡番号11）は原村柏木区の西南方約500mに位置している。このあたりは八ヶ岳西麓にあたり、東西に細長く発達した大小様々の尾根がみられる。原村の遺跡の多くはこのような尾根上から南斜面に存在している。阿久遺跡の周辺には縄文時代と平安時代の大小様々な遺跡が分布しているがその密度は極めて高い。

本遺跡は、八ヶ岳から流下する阿久川と大早川によって南と北を浸食された東西に細長い尾根上から緩やかな南斜面に展開している。

調査の対象は中央自動車道より東の遺跡外縁部にあたるが、南斜面は国史跡と阿久川、北斜面は国史跡と大早川に挟まれた範囲である。南斜面では水場遺構の発見を少なからず期待していたが、検出することはできなかった。南の阿久川側は比較的緩やかな傾斜で普通畑が多く地味は良い。北の大早川側はきつい斜面で水田造成による切り盛りが著しい。標高は900m前後を測る。

次に過去の調査歴について振り返ってみよう。

阿久遺跡は、過去8次にわたり発掘調査が実施されている。第1～4次調査は長野県教育委員会、第5～8次調査は原村教育委員会が行った。

第1～4次調査は、昭和50～53年度に中央自動車道西宮線の建設に先立ち実施している。昭和50年度の第1次発掘調査は範囲確認調査であり、同51～53年度に行われた第2～4次発掘調査では従来の考古学上の知見をこえた諸遺構の発見が相次いだ。それは縄文時代前期の大規模な環状

集石群の露呈と、その下層から発見された関山式併行期の馬蹄形集落跡・方形柱列群・立石と列石群である。それらの遺構は、縄文時代前期の社会構造が理解できる資料で、その重要性が認識され「縄文時代観の転換」とまでいわれた。保存運動が持ち上がり遺跡保存か、中央道の早期開通かで流動したが、最終的には関係者の協力で大幅に設計変更したうえで、道路下に埋没保存されることになった。

第5次調査は、昭和53年度に行った「重要遺跡範囲確認調査」であり、遺跡の範囲を確定したうえで55,940.97㎡が昭和54年7月2日に国の史跡に指定された。第6次調査は、昭和53年度に保存に係る設計変更で生じた村道改良事業に先立つもので、縄文時代中期中葉の住居址1軒と集石2基を検出した。

第7次調査は、平成5年度に遺跡の東側外縁部における範囲確認調査である。

第8次調査は、平成7年度に中部電力の鉄塔建設に先立つもので小堅穴2基を検出している。本調査が第9次調査ということになる。

IV グリッド設定・土層・調査方法

今回は公共座標第Ⅷ系に合わせた基準杭を数本設置し、これを基準に調査区を設けた。調査区はまず50×50mの大地区を設定し、さらに大地区の中を2×2mのグリッドに分割した。個々のグリッドの縦軸には算用数字、横軸にはA～Yの符号をつけた。これにしたがって、X = -428.000、Y = -2756.000を「R地区A-50」グリッドと定め調査区を設定した。遺物の取り上げは、遺構に伴うものは遺構別、伴わないものは基本的にグリッド単位で行い、遺物への注記に生かしてある。ただし、本書に記載した遺構外遺物については記載が煩雑になるため、グリッド名は省略した。

出土遺物数は遺構一覧表に記載したが、復原作業が終了していないため概ねのものである。未だ分析に手を付けていないため異なる時代の遺物はカッコ付けで記入した。

土層については大まかにみると、第Ⅰ層は黒色土（耕作土）、第Ⅱ層は黒褐色土、第Ⅲ層は黄褐色土（ソフトローム層）である。

調査は、まず対象地の東西方向に幅1.2m（バケット幅）のトレンチを重機で掘削し、引き続き人力でトレンチ内の精査を行い、その結果を踏まえて面的調査範囲を決定した。トレンチ調査は第Ⅲ層（ソフトローム層）上面までとしたが、南斜面は阿久川よりではⅡ層の堆積が厚くⅢ層上面まで掘り下げることができなかった所もある。また南斜面阿久川近くでは旧河川の河床とみられる自然礫群の存在が認められた。河床とみられる自然礫群を検出した箇所は礫面直上までの調査である。



第1図 発掘調査区域図・地形図 (1 : 4000)

V 遺構・遺物

1 調査の概観

阿久遺跡は国の史跡であるが、県営圃場整備事業の範囲は史跡指定地を取り囲む外縁部が対象地である。そのため調査は、前述した「発掘調査の経過」の項でも述べたように便宜的に、① 南斜面と史跡東尾根上、② 北斜面、③ 中央道西（平成12年調査予定地の確認調査）の3地点に分けて実施した。それぞれの調査面積は、① 南斜面のトレンチ調査は738㎡、面的調査は7,278㎡で合わせて8,016㎡である。② 北斜面のトレンチ調査は492㎡で、③ 中央道西（平成12年調査予定地の確認調査）のトレンチ調査は1,337㎡で、3地点の総計は9,845㎡である。

① 南斜面と史跡東尾根上

検出した縄文時代・平安時代の竪穴住居址と小竪穴は全てこの地点からの検出である。

② 北斜面

縄文時代の土器破片数点が出土しただけで遺構を検出するまでには至らなかった。

③ 中央道西（平成12年調査予定地の確認調査）

縄文時代前期と平安時代の遺物が僅かに出土したが、縄文時代前期の居住域からは外れているようである。平安時代の遺物は少なかったが、地形を考慮すると住居址が埋没していることが考えられる。

なお、本書では概略を報告するにとどめ、後日あらためて正報告書を刊行する予定である。

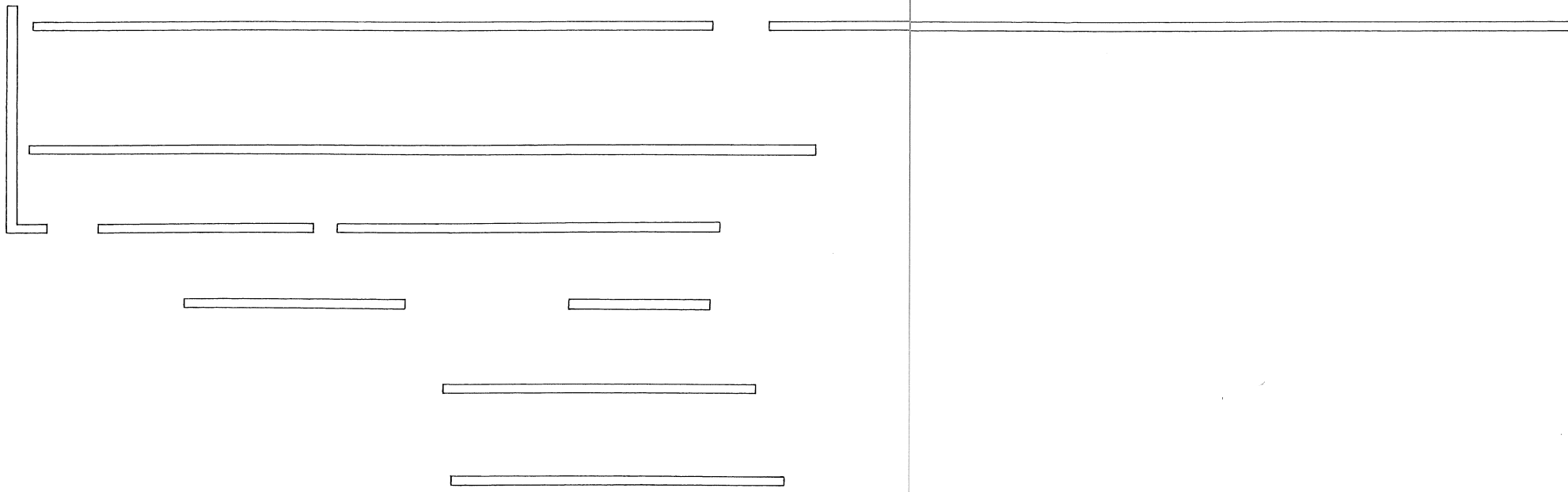
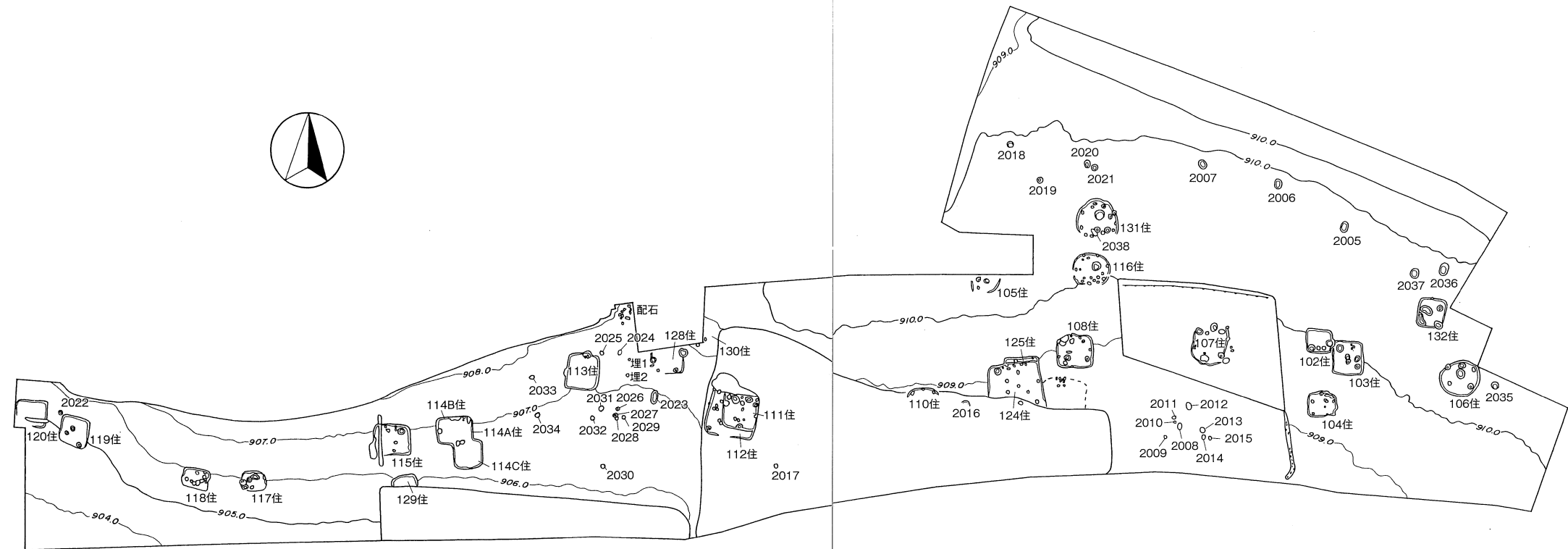
2 主な遺構と遺物

本調査で検出した遺構と遺物は、縄文時代と平安時代に大別できるが、小竪穴は遺物が伴出し帰属時期を明らかにできたものは1基だけであるが、未だ分析には手を付けることができないため時代不詳としておきたい。

遺構番号は、保存運動に係り設計変更で生じた村道改良事業に先立ち、村教育委員会が昭和53年度に実施した第6次調査で縄文時代中期中葉の住居址1軒を検出し、中央自動車道用地内と区別する意味合いから第101号竪穴住居址の番号を付してあるため、それに続く第102号竪穴住居址とした。なお、検出した住居址は時代別の「遺構一覧表」を作成したが、調査を進めた過程で重複を確認した第114号住居址は、第114A、114B、114C号と付してある。また、121・122・123・126・127は欠番となる。小竪穴も同様のことから小竪穴2005の番号から付した。

遺構数と帰属時期については今後の整理作業で変更される可能性があることを断っておきたい。

主な遺構と遺物について概略を記してみたい。



第2図 全体図 (1:300)





写真1 発掘区全景 空中写真



写真2 発掘区全景 空中写真

1) 縄文時代

検出した遺構は、竪穴住居址5軒、埋甕2基、小竪穴4基である。

埋甕は単独出土で、住居址を検出できなかったため屋外埋甕と考えたものである。

(1) 竪穴住居址

① 第105号竪穴住居址 (第2図、写真3・5・6)

第Ⅲ層上面で平面プランを確認した。北側の半分くらいは村道の下にかかっており、調査できたのは南側の半分くらいである。村道下については調査最終段階で舗装を剥ぎ精査を試みたが、遺構はすでに消滅していた。平面形は残存部から推測すると径3.85mほどの円形を呈するようである。壁高は4cmほどにすぎないうえに、その一部は攪乱により失われている。床面はほぼ平であるが硬化面や貼床はみられない。周溝は部分的に認められた。ピットは2基検出しただけである。炉はほぼ中央に石囲炉があるが、すでに炉石は抜き取られ一部が残存していただけである。炉底部は焼けている。

遺物は少ない。土器は中期後葉の2点(写真5・6)で、いずれも床面から15cmほど浮いていた。(6)は伊那谷系である。

石器は図示していないが当地方で産出する安山製の磨石1点がある。



写真3 第105号竪穴住居址

② 第131号竪穴住居址（第2・3・5図、写真4・7～9）

第Ⅲ層上面でプランを確認したが、平安時代の墓壙である小竪穴2038と重複していた。本址も南側の一部が村道の下にかかっていたが、舗装を剥がすと壁はすでに失われていたが、ピット2基を検出した。これにより平面形は径5.67mのやや不整な円形を呈していることが推測できた。壁高は最大で19cmほどを計る。床面はほぼ平であるが硬化面や貼床はみられない。周溝は北東部と南西部で部分的に認められただけであり全周していない。ピットは17基検出した。炉は中央やや奥壁寄りに方形切り炬燵状石囲炉が構築されていたものと思われるが、すでに炉石は抜き取られ小さい詰め石が残存していただけである。炉底部の焼土は厚くかなり火熱を受けていることが理解できる。東壁際には埋甕が存在していた。底部を欠損する深鉢を正位で埋設したものである。

遺物はそれほど多くない。土器は中期後葉の3点（写真7～9）で、（写真9）は埋甕に使用されていたものである。（写真7・8）は床面よりやや浮いた状態で出土した。

石器は、黒曜石製の石錐2点（第5図8・9）、凝灰岩製の磨製石斧が2点（10・14）あり、（10）は小形で基部を欠損する。打製石斧2点（12・13）は、（12）は頁岩製、（13）は砂岩製である。当地方で産出する安山製の凹石（16）は、磨石・敲石として使用されたようである。

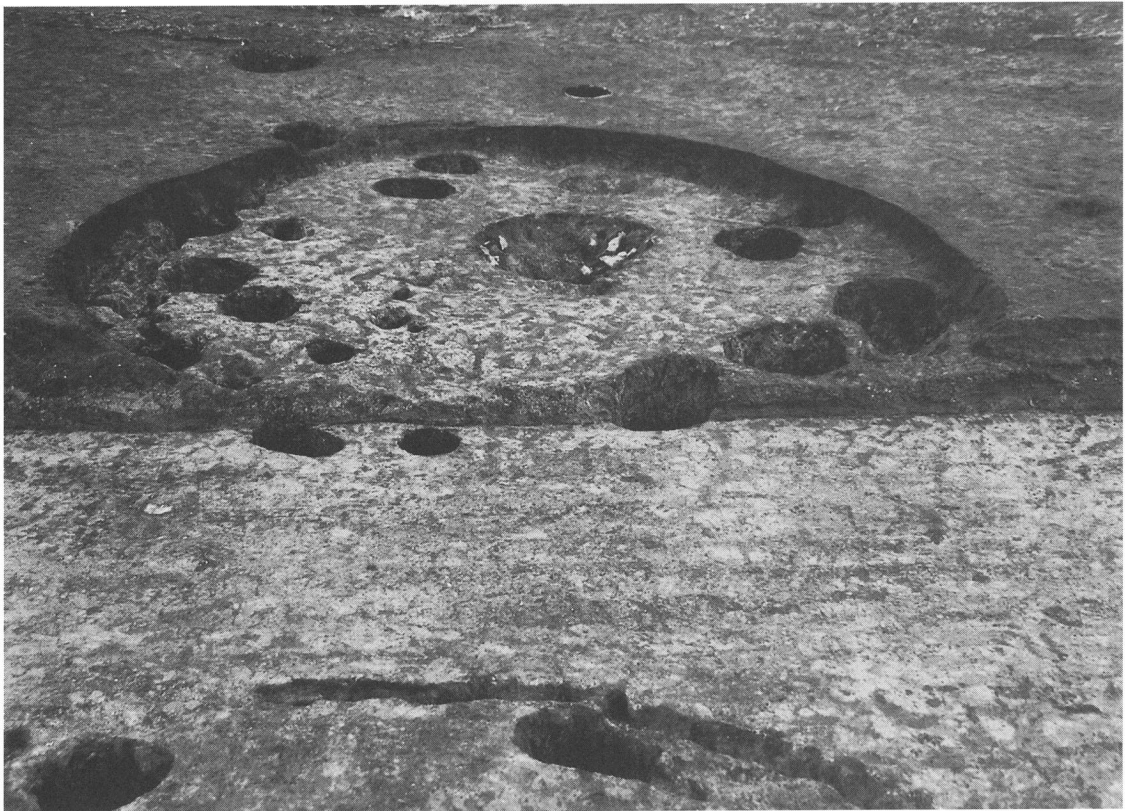


写真4 第131号竪穴住居址



第3図 第131号竪穴住居址、小竪穴2038実測図(1:3)

(2) 埋甕

埋甕は単独出土であり、住居址が検出できないことから屋外埋甕と思われるが、平成11年に調査した白ヶ原南遺跡に類似するものがあり、埋甕で報告しているため同様にした。

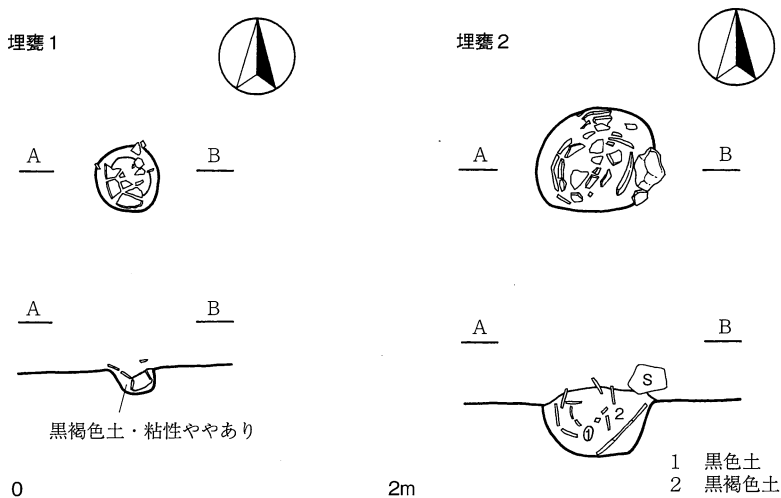
① 埋甕1 (第2・4図、写真10)

埋甕は第Ⅱ層中に、平面形は33×35cmのほぼ円形で深さは検出面から約15cmの掘り方をもち、ほぼ完形土器が正位で埋設されていた。第4図の断面図でみるように、外圧で生じたと思われる破損がみられ、埋設土器は元形を留めていなかった。土器内の土はやや粘性のある黒褐色土であった。埋設土器は(写真10)で後期前葉である

② 埋甕2 (第2・4図、写真11)

埋甕は第Ⅱ層中に、平面形は55×65cmの楕円形で深さは検出面から約35cmの掘り方をもち、2個体の土器が埋設されていた。便宜的に土器1、土器2で記述したい。土器1は、ほぼ完形土器が正位で埋設されていたが、埋甕1同様に外圧で生じたと思われる破損がみられ、口縁部は胴部に落ち込むような状態であった。土器2は、土器1の北寄り外側に埋設されていたが、胴下半を欠損する深鉢で口縁部は全周しない。黒褐色土中のことでくわしいことはわからないが、破片が縦に重なった状態であるが、口径は土器1よりも小さいものであり二重に埋設することは不可能である。埋設土器の重複も考えられるし、上記した外圧による破損部の補修であるかもしれない。

土器1内の土は黒褐色土であるが、一部ブロック状の黒色土が認められた。また、僅少なながら炭化物が中位で認められた。



第4図 埋甕1・2実測図(1:40)

(3) 小竪穴

その多くは第Ⅲ層上面でプランを確認した。遺構一覧表に形態・規模などをまとめたが未だ分析に手を付けていないが、遺構の状態からみて小竪穴2005~2007・2036の4基を縄文時代の陥し穴と考えた。

陥し穴である4基の小竪穴は、遺跡東端の平坦部に尾根筋方向に直線的に並び、長軸の方向は尾根筋に概ね直交する方向である。

図示してないが平面の規模と深さは小竪穴2005~2007がほぼ同様で、小竪穴2035はやや大きい

が浅い。陥し穴の特徴の1つである底面に穿たれた逆茂木の小穴は、小竪穴2005・2007に1基、小竪穴2006・2036に2基ある。

小竪穴を2分割し逆茂木の小穴を観察したが、4基とも平成9年度に調査した南平遺跡「埋め込むタイプ」であった。

なお、帰属時期不詳の小竪穴のなかには柱穴状のものが多くみられた。

(3) 遺物

第105・131号竪穴住居址、埋甕1・2から出土した土器を掲載した。

① 土器 (写真5～11)

縄文時代中期後葉と後期前葉に大別できる。中期後葉は第105号竪穴住居址の(写真5・6)、第131号竪穴住居址の(7～9)で、後期前葉は埋甕1の(10)と埋甕2の(11)である。

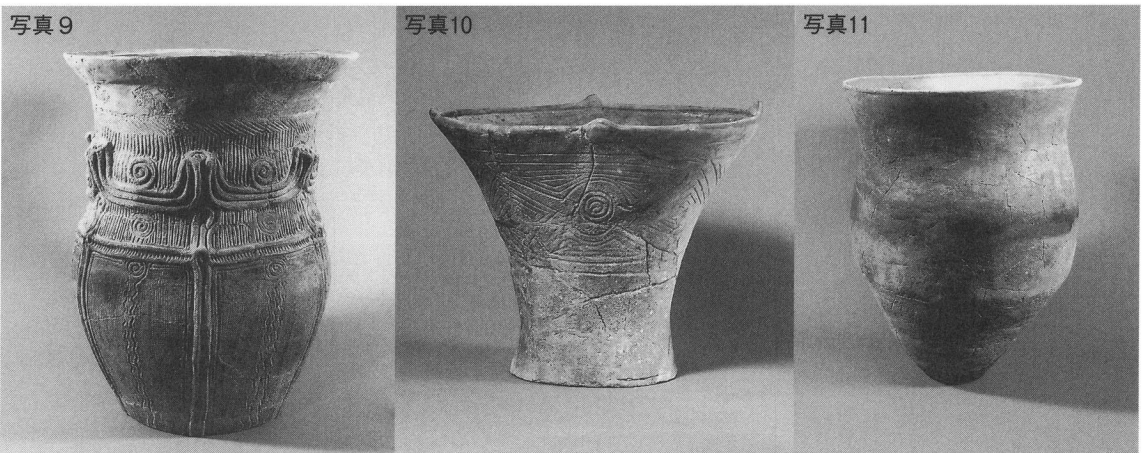


105号 高さ26cm

105号 高さ26cm

131号 高さ18.5cm

131号 高さ24cm



第131号 現高57.5cm

屋外埋甕1 高さ20cm

屋外埋甕2 高さ54cm

② 石器（第5図）

16点を選択し図示した。

石鏃（第5図1～5） 1～5は遺構外

1～4の石鏃は良質透明な黒曜石が用いられ、同じ加工と素材の石鏃である。素材は不明であるがバルブの発達しない剥片の可能性が高い。加工は押圧剥離技術で行われている。押圧剥離の剥離面は非常に狭い打点と薄い剥片が器体の表面の中央にまで伸びている剥離面で、側辺のエッジは真っ直ぐである。こうした剥離面は径の細いソフトハンマーによって形成される。ハンマーの当て方は平坦と急角度の2種類あり、後者は特に鋸歯縁の縁辺をつくる。

5の石鏃は漆黒の黒曜石で、やや厚い素材である。剥離面は打点の明瞭なバルブのある剥離面で、1から4までの石鏃の工具よりは変形しにくい工具のようである。

石錐（第5図6・8・9） 6は遺構外、8・9は第131号住居址

棒状の石錐が3点ある。加工技術はどれも同じで、打点の明瞭な急角度の貝殻状の押圧剥離面である。素材はすべて両極石器で、9は素材の剥離面をよく残している。

削器と石匙（第5図7・11） 7・11は遺構外

7は削器。黒曜石の剥片の縁辺を刃部に行っている。加工は押圧剥離。11は石匙。風化の激しい頁岩の石匙。剥離面の打点と稜線はほとんど見えない。

磨製石斧（第5図10・14・15） 10・14は第131号住居址、15は遺構外

10は小形の磨製石斧。緑色凝灰岩製。剥片をそのまま研磨した小形の磨製石斧。14は中形の磨製石斧。凝灰岩製。剥片素材で、小形磨製石斧と同じ製作技法。15は通常の中形磨製石斧。緑色岩製。分厚い剥片を素材にして、直接打撃で成形加工、敲打で整形加工を行っている。

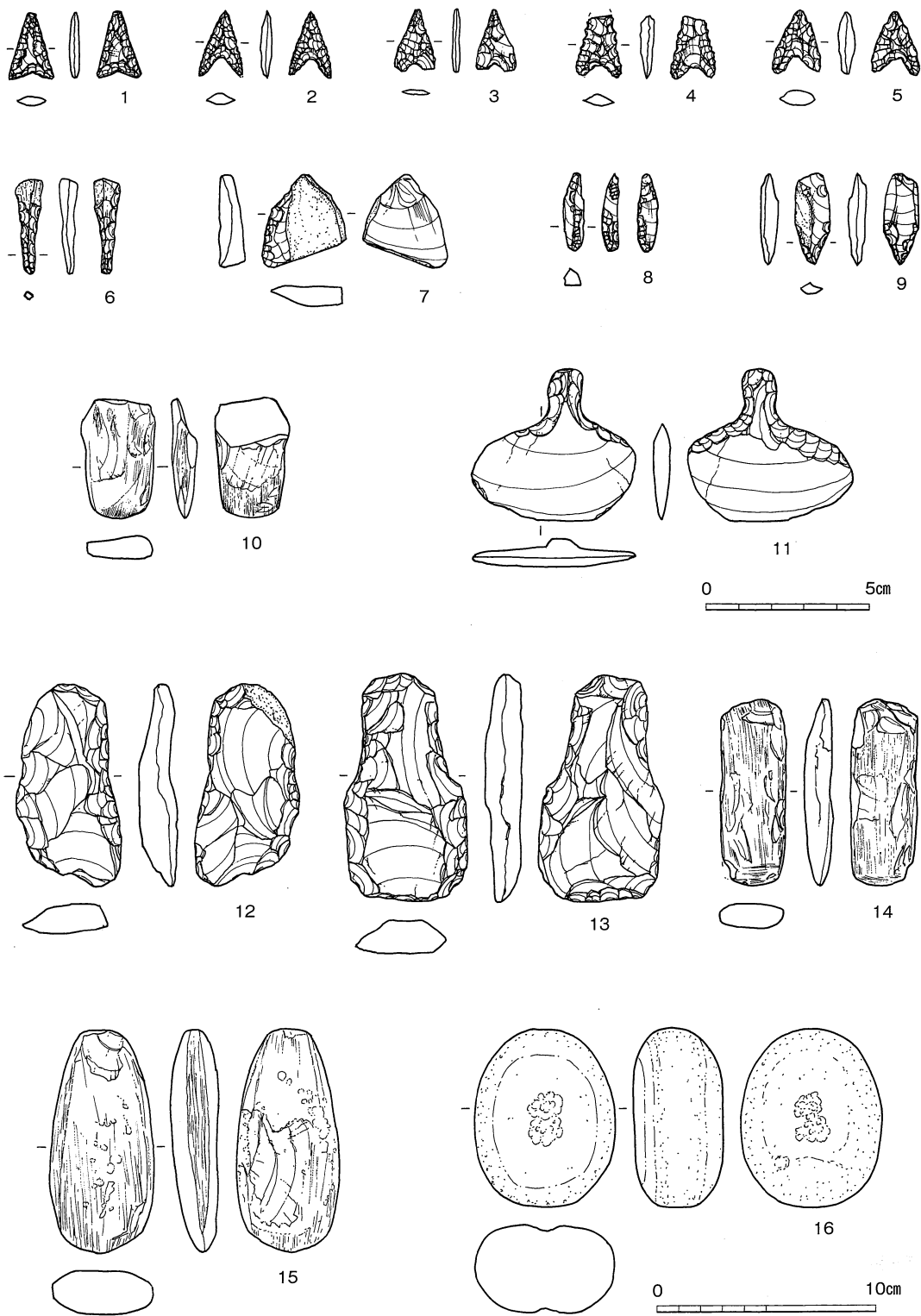
磨製石斧は研磨加工だけの石斧と敲打加工をなす石斧の2種類がある。これらは時期の違いか、同時期の異文化の違いかが今後の分析の課題である。

打製石斧（第5図12・13） 12・13は第131号住居址

12は風化の激しい頁岩の打製石斧。成形加工はハードハンマーの直接打撃。13は硬質砂岩の打製石斧。成形加工はハードハンマーの直接打撃。ふたつの打製石斧の側辺には刃潰し加工や、垂直打撃の加工はみられない。

敲石類（第5図16） 16は第116号住居址

磨石の使用後、叩き石に転用している石器である。



第5图 石器实测图 (1~11 <1:2> 12~16 <1:3>)

2) 平安時代

検出した遺構は、竪穴住居址22軒、小竪穴1基（墓壙）である。

(1) 竪穴住居址

① 第102号竪穴住居址（第2・6・7図、写真12・13）

第Ⅲ層上面でプランを確認した。第103号竪穴住居址と重複していたが本址が新しい。平面形は東西3.65m、南北3.25mのやや東西に長い不整な長方形を呈し、壁高は最大で30cmを計る。床面はほぼ平であるが硬化面や貼床はみられなかったが、焼土がところどころで見受けられた。周溝は壁直下にはほぼ全周しており溝内には小穴が並んでいる。ピットは3基検出したがいずれも南側にあり性格は不明である。カマドは東壁やや南寄りに構築されている。

さて、本址は焼失した住居であり、多量の炭化材が遺存していた。その多くは建築材と思われるが、なかには柄穴と思われる加工痕を有するもの、建具や工具と思われるものがある。また、屋根材と推測できる植物の茎も少なからず出土した。未だ十分な検討はできないているが、正報告の折りにはより詳細な分析を考えている。

遺物はそれほど多くない。土師器坏・甕・小形甕、灰釉陶器碗（第7図）がある。鉄製品は図示していないが紡錘車・刀子・鉄鏝がある。

② 第119号竪穴住居址（第2・7図、写真14）

第Ⅲ層上面でプランを確認した。南壁が流失しているため平面形は推定の域をでないが、約4.05mの隅丸方形を呈するものと思われ、壁高は最大で40cmを計る。床面はほぼ平であるが硬化面や貼床はみられない。周溝は壁直下にめぐるが流失した南側では認められなかった。ピットは4基検出したが性格は不明である。カマドは北東隅に石組粘土カマドが構築されているが、遺存状態は非常に良好であった。

遺物は多くカマド周辺に集中していた。土師器坏・羽釜・甕、灰釉陶器碗（第7図）がある。

③ 小竪穴2038（第2・3・7図）

縄文時代の第131号竪穴住居址の調査途上で確認した。住居址の検出面から13cm程掘り下げた時点で長方形の落ち込みを認め、これを掘り下げると平安時代の土師器2点が出土し、さらに硬化面が認められた。131号住居址より新しい小竪穴を認定したが、うかつにも住居址をかなり掘り進めた段階であった。硬化面は長方形を呈し131号住居址の床面よりも上部に存在し、本層竪穴の底面であることが理解できた。遺物は底面より2cmほど浮いていた。

平面形は101×70cmの長方形で、確認面からの深さは14cmほどである。小竪穴の形態と遺物の出土状態から墓壙と思われる。

遺物は土師器坏と灰釉陶器碗（第7図）がある。

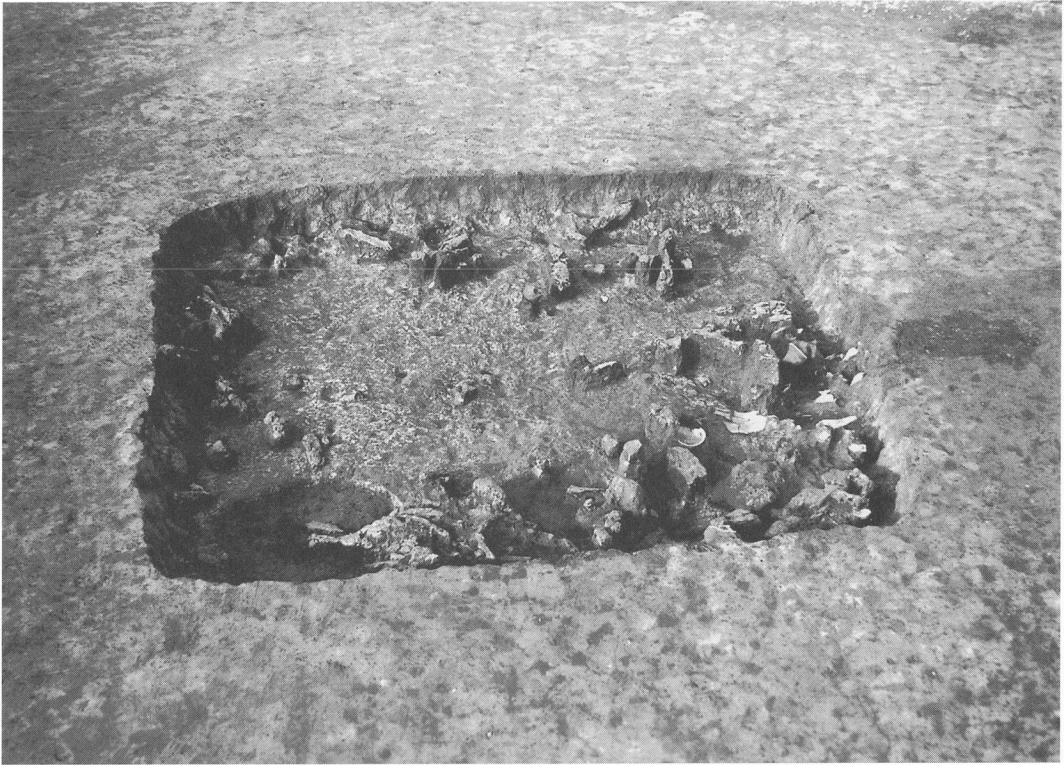
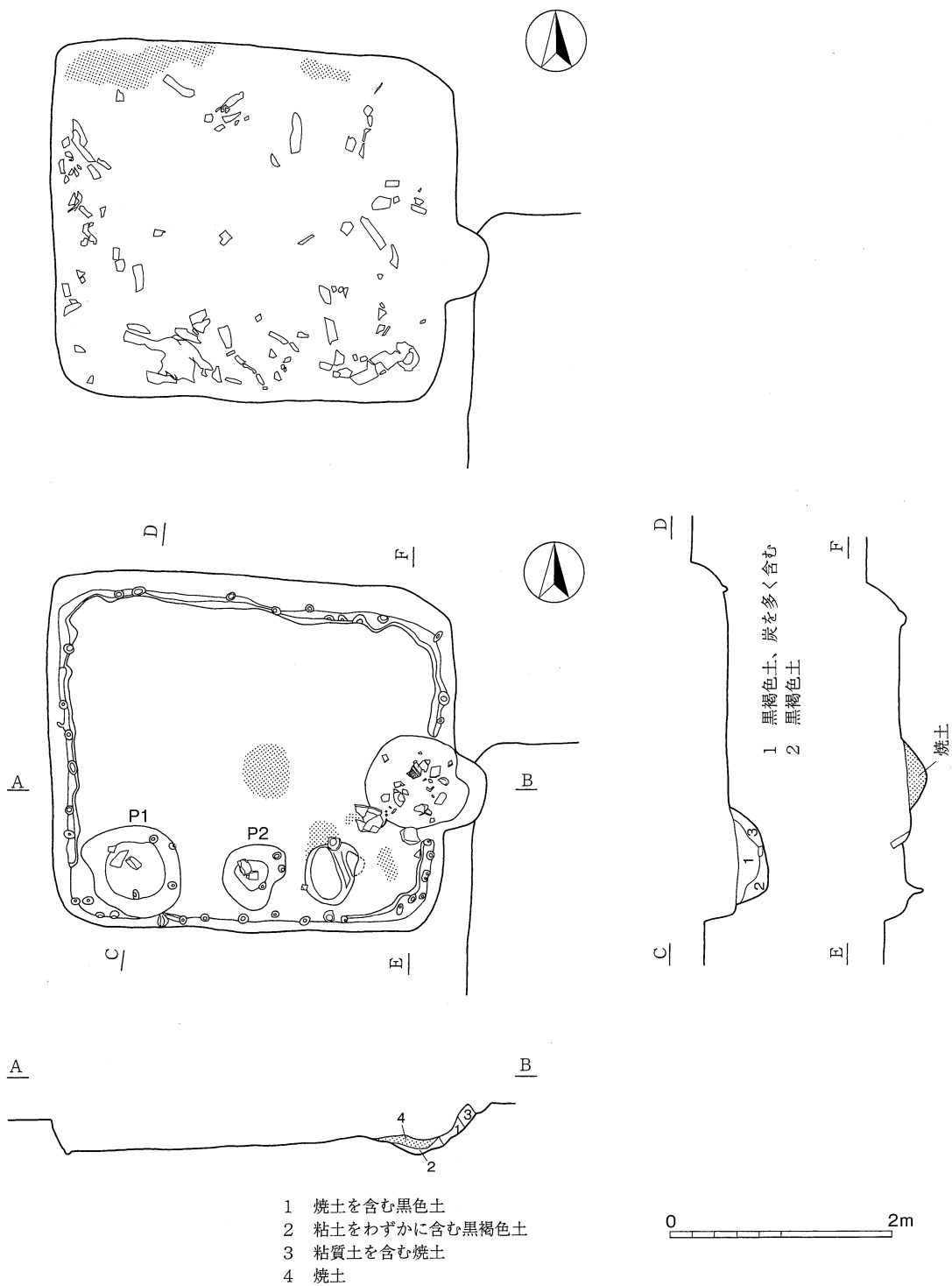


写真12 第102号竖穴住居址



写真13 第102号竖穴住居址炭化材



第6図 第102号竪穴住居址実測図 (1:3)



写真14 第119号竪穴住居址

(3) 遺物

第102・119号竪穴住居址、小竪穴2038から出土した遺物を図示した。

① 土師器 (第7図)

土師器は坏・羽釜・甕・小形甕がある。

第102号竪穴住居址は坏(第7図1～6)、甕(9)、小形甕(10・11)、第119号竪穴住居址は坏(12・13)、羽釜(16)、甕(17～20)で羽釜は底部を欠損するが良品である。小竪穴2038は坏(21・22)がある。

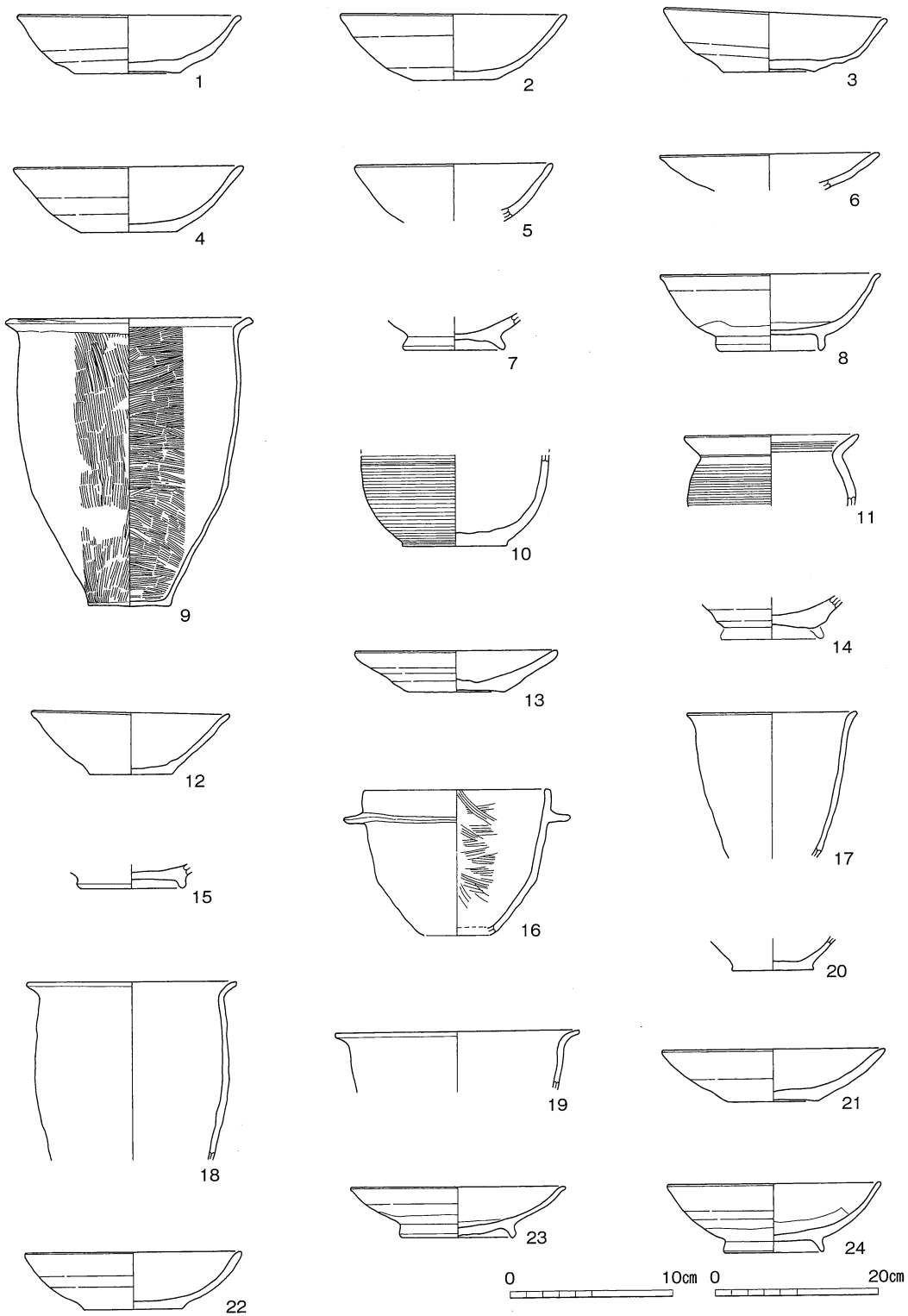
② 灰釉陶器 (第7図)

灰釉陶器は碗がある

第102号竪穴住居址は(第7図7・8)、第119号竪穴住居址は(14・15)、小竪穴2038は(23・24)がある。

③ 鉄製品

第102号竪穴住居址から紡錘車・刀子・鉄鏃が出土したが図示してない。



第7图 第102·119号豎穴住居址、小豎穴2038出土土器（1~8·10~15·21~24〈1:4〉 9·16~20〈1:8〉）

VI まとめ

当初は国史跡の範囲同様に南斜面では縄文時代前期の遺構と遺物、阿久川寄りでは水場遺構の検出を期待した調査であったが、縄文時代中期と平安時代後期の遺構と遺物が大半を占め、前期の遺構と遺物は調査段階では見いだせなかった状態であり、前期の居住域からは外れていたようである。

検出した縄文時代の遺構と遺物は、現段階の所見では中期後葉～後期前葉である。

中期の住居址に目をむけると、第6次発掘調査で本調査地の北から中葉期の住居址1軒が出土しており、後葉の住居址は中央自動車道の南東外れで1軒確認されていただけである。

本調査資料を加えると中央自動車道より東に居住域のあることは容易に考えられることであり、本調査地点に前期の遺構のないことが明らかになり、阿久遺跡では前期と中期では居住域が異なっているようである。この知見は、阿久遺跡の性格を追求していくうえで重要な資料になるものと思われる。

平安時代は、緩やかな南斜面で竪穴住居址22軒を検出したが、中央自動車道建設に先立つ発掘調査を合わせると30軒を数え、村内では一番多い住居址数になる。

未だ分析に手をつけていないが、火災で廃絶した第102号竪穴住居址、小竪穴2038は墓墳であり、それらが保有している情報量は多く、当地方における平安時代の集落址解明に欠くことのできないものとなろう。正直いって22軒におよぶ住居址の検出は驚きであった。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

参考文献

- 197903 原村教育委員会『原村の文化財1 阿久遺跡（第5次発掘調査）重要遺跡範囲確認調査報告書』
- 198203 長野県教育委員会『昭和51・52・53年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村その5』
- 199403 原村教育委員会『原村の埋蔵文化財26 阿久遺跡（第7次発掘調査）平成5年度範囲確認調査報告書』
- 199803 原村教育委員会『原村の埋蔵文化財44 南平遺跡発掘調査概報 原村の縄文遺跡がいまよみがえる』
- 200003 原村教育委員会「阿久遺跡」『原村の埋蔵文化財52 白ヶ原南遺跡（第1・2次）前沢遺跡（第4次）阿久遺跡（第9次）平成10・11年度県営圃場整備事業原村西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書』

表1 遺構一覧表

縄文時代竪穴住居址

番号	平面形	規		模	遺物など
		長軸	短軸	深さ	
105	不明	(385.0)	(190.0)	4.0	縄文中期深鉢3、土器破片269 (内9個体の破片108)、横刃形石器1、凹石・磨石2、(土師器坏破片1、甕破片1、灰釉陶器破片1)
106	楕円形	542.0	(460.0)	4.0	縄文中期深鉢1、縄文中期土器破片(底部)1、横刃形石器1、凹石1、石器剥片1、黒曜石剥片3
110	楕円形	415.0	174.0	56.0	縄文中期深鉢1、土器破片34 (内4個体の破片23)、打製石斧(破損)1、叩石1、石器剥片1、黒曜石剥片1、(土師器坏1、破片3、須恵器破片17、灰釉陶器破片2)
116	円形	520.0	(440.0)	3.0	縄文中期土器破片75 (内2個体の破片19)、凹石1、無頭石棒1 (火熱による破損片19、内17片接合)、黒曜石剥片4、(土師器坏破片4、甕破片3、灰釉陶器破片5)
131	楕円形	567.0	(468.0)	19.0	小竪穴2038 (平安時代墓墳) と重複本址が古い、縄文中期深鉢3 (内1は埋甕)、口縁部1、底部1、土器破片268 (内7個体の破片86)、石錐2、打製石斧3、磨製石斧2、凹石・磨石1、原石1、石器剥片3、黒曜石剥片9、(土師器坏破片7、須恵器破片3、灰釉陶器破片1)

平安時代竪穴住居址

番号	平面形	規		模	遺物など
		長軸cm	短軸cm	深さcm	
102	隅丸方形	365.0	325.0	30.0	土師器坏7、破片71、甕3、破片65、灰釉陶器碗1、紡錘車1、刀子2、鉄鏃1、(縄文中期土器破片4、凹石1、黒曜石剥片1)
103	隅丸方形	463.0	420.0	26.0	土師器坏2、破片140、甕1、破片104、須恵器破片1、灰釉陶器破片5、刀子3、鉄滓4、(石器剥片1、黒曜石剥片2)
104	隅丸方形	393.0	356.0	47.0	土師器坏破片159、甕破片3、須恵器破片1、灰釉陶器破片9、(縄文中期土器破片4、磨製石斧片1、凹石1、磨石1、石器剥片1)
107	隅丸方形	556.4	512.0	4.0	土師器甕片1、須恵器片1
108	隅丸方形	493.3	145.6	31.0	土師器坏3 (内1に不明墨書)、破片328、甕破片74、須恵器破片8、須恵器四耳壺破片1、灰釉陶器破片23、刀子1、(縄文早期押型文土器破片6、中期土器破片20、凹石1、磨石1、叩石1、原石1、黒曜石剥片4)

109	不明	(530.0)	(183.0)	(20.0)	土師器坏破片40、甕破片7、灰釉陶器破片3、鉄滓2、(縄文早期押型文土器破片2、磨製石斧?1、黒曜石剥片3)
111	隅丸方形	492.0	482.0	31.0	112号住居址と重複、土師器坏5(内1に不明墨書)、破片379(内9個体の破片35)、甕破片141、須恵器破片31、灰釉陶器破片30、鉄鏃1、(打製石斧(破損)1、凹石?1、原石1、黒曜石剥片3)
112	隅丸方形	(640.0)	600.0	14.0	111号住居址と重複、土師器坏2(内1に墨書「又」?)、破片19(内3個体の破片7)、甕破片33、須恵器破片9(内同個体の破片2)、灰釉陶器破片8、(磨石1)
113	隅丸方形	498.0	493.0	61.0	土師器坏1、破片191、甕破片48(内2個体の破片47)、須恵器破片4、灰釉陶器壺1(頸部)、破片124、刀子1、鉄鏃?1、(縄文中期土器破片65、凹石1、石器剥片3、黒曜石剥片6)
114A	隅丸方形	(340.0)	(336.0)	60.0	土師器坏12、破片160(内2個体の破片6)、甕破片70、灰釉陶器碗1、破片5、鉄鏃1、鉄滓2、砥石1、(凹石1、黒曜石剥片2)
114B	隅丸方形	(508.0)	(382.0)	55.0	土師器坏2、破片4、甕破片1、鉄滓1、(縄文中期土器破片2、軽石2、凹石1、叩石1)
114C	隅丸方形	(420.0)	(380.0)	51.0	土師器坏18(内3に墨書「大」2、不明1、内3に暗文)、破片187(内2個体の破片12)、甕破片19(内同個体の破片5)、須恵器破片3、灰釉陶器碗2、破片2、鉄鏃4、(縄文中期深鉢底部1、土器破片4、石鏃1、叩石1、黒曜石剥片2)
115	隅丸方形	492.0	425.0	47.0	土師器坏3、破片218(内3個体の破片73)、甕破片7、須恵器破片2、灰釉陶器皿1、碗1、破破片35(内2個体の破片15)、(縄文中期土器破片1、横刃形石器?1、凹石1、黒曜石剥片3)
117	隅丸方形	366.0	(277.0)	44.0	土師器坏破片28、甕破片45、須恵器破片1、灰釉陶器皿1(硯)、碗1(硯)、破片3、鉄滓1、(縄文中期24、原石1、石器剥片1)
118	隅丸方形	370.0	(250.0)	26.0	土師器坏1(灯明皿?)、破片40、甕破片1、灰釉陶器碗1、破片5
119	隅丸方形	405.0	(400.0)	40.0	土師器坏4(内2は120号住居址と接合)、破片35(内同個体の破片3)、甕4、破片66(内同個体の破片6)、羽釜1、灰釉陶器破片5、(縄文中期土器破片30、凹石3、黒曜石剥片2)
120	隅丸方形	416.0	(350.0)	33.0	土師器坏破片26、甕破片23、羽釜破片56、須恵器破片1、(縄文中期土器破片106)

121	欠番				
122	欠番				
123	欠番				
124	隅丸方形	(387.0)	(220.0)	56.0	125号住居址と重複、土師器坏8、破片414 (内5個体の破片20、墨書土器破片1)、甕破片112 (内3個体の破片15)、羽釜破片7 (同個体)、須恵器破片14、灰釉陶器碗2、破片41 (内同個体の破片4)、土錘1、刀子1、鉄鏃1、(縄文早期押形文土器破片3、中期土器破片12、横刃形石器1、叩石1、石器剥片2、水晶剥片1、黒曜石剥片8)
125	隅丸方形	(663.0)	(520.1)	32.0	124号住居址と重複、土師器坏1 (暗文)、破片86 (内同個体の破片10)、甕破片18 (内同個体の破片4)、須恵器破片2、(縄文中期土器破片3、磨製石斧1、黒曜石剥片3)
126	欠番				
127	欠番				
128	隅丸方形	453.0	(366.0)	25.0	土師器坏3 (内2暗文)、破片266 (内6個体の破片30)、甕破片79、須恵器破片10、灰釉陶器破片2、鉄滓1、(縄文中期土器破片11、叩石2、黒曜石剥片1、陶器破片1)
129	隅丸方形	352.0	154.0	39.0	土師器坏破片13、甕破片31、灰釉陶器破片1、鉄滓1、(縄文中期土器破片13)
130	隅丸方形	(300.0)	(199.0)	55.0	土師器坏破片12、甕破片10、須恵器破片3、鉄滓1、(縄文中期土器破片4、黒曜石剥片1)
132	隅丸方形	395.0	352.0	54.0	土師器坏1 (暗文)、破片25 (内2個体の破片9)、甕1、破片138 (内同個体の破片5)、鉄鏃1、鉄滓1、(黒曜石剥片3)

縄文時代・平安時代・時代不詳小竪穴

番号	平面形	規 模			備 考
		長軸cm	短軸cm	深さcm	
2005	隅丸長方形	140.0	100.0	70.0	陥し穴、埋土はレンズ状堆積壁土の崩れ有り、底面に小穴1基
2006	楕円形	145.0	109.0	67.0	陥し穴、埋土はレンズ状堆積壁土の崩れ有り、底面に小穴2基
2007	楕円形	143.0	115.0	74.0	陥し穴、埋土はレンズ状堆積壁土の崩れ有り、底面に小穴1基、(須恵器破片1)
2008	楕円形	81.0	70.0	26.0	
2009	円形	43.0	41.0	20.0	
2010	円形	42.0	41.0	18.0	土師器坏破片1
2011	円形	41.0	36.0	24.0	土師器坏破片2
2012	円形	85.0	78.0	32.0	

2013	橢円形	102.0	80.0	39.0	
2014	円形	65.0	58.0	27.0	土師器破片5、須恵器破片1
2015	円形	35.0	35.0	17.0	縄文中期土器破片8
2016	橢円形	97.0	(55.0)	63.0	土師器坏破片4、甕破片2
2017	円形	47.0	43.0	26.0	
2018	橢円形	95.0	76.0	31.0	縄文中期土器破片24
2019	橢円形	95.0	(56.0)	11.0	黒曜石剥片1、土師器甕破片3
2020	橢円形	128.0	80.0	10.0	
2021	橢円形	88.0	76.0	31.0	縄文中期土器破片7、叩石1、凹石2
2022	円形	64.0	62.0	57.0	柱穴状、縄文中期土器破片1
2023	橢円形	207.0	97.0	16.0	縄文中期土器破片1
2024	円形	48.0	42.0	49.0	柱穴状、土師器坏破片1
2025	円形	40.0	40.0	66.0	柱穴状
2026	円形	35.0	35.0	32.0	柱穴状、土師器坏破片4、甕破片26
2027	円形	49.0	49.0	28.0	柱穴状、土師器坏破片1、灰釉陶器破片1、石器剥片1
2028	円形	35.0	33.0	32.0	柱穴状
2029	円形	38.0	37.0	31.0	柱穴状、縄文中期土器破片1
2030	円形	47.0	44.0	29.0	柱穴状
2031	円形	37.0	34.0	45.0	柱穴状
2032	不整形	36.0	33.0	32.0	柱穴状
2033	円形	57.0	53.0	34.0	
2034	円形	70.0	68.0	48.0	
2035	円形	100.0	93.0	18.0	
2036	橢円形	170.0	135.0	58.0	陥し穴、埋土はレンズ状堆積壁土の崩れ有り、底面に小穴1基
2037	円形	116.0	105.0	33.0	
2038	長方形	101.0	70.0	23.0	131号住居址（縄文時代）と重複本址が新しい、平安時代の墓壙、土師器坏2、破片30（内同個体18）、灰釉陶器皿1、碗1

時代不詳配石

番号	平面形	規		模	備考
		長軸 cm	短軸 cm		
1	橢円形?	280.0	180.0		安山岩の礫を弓状に配石、礫は16×18～54×30cmで比較的平板状のものが多。崩れのためか不明瞭な箇所あり、平面形は概ね橢円形で礫の重なりもみられた。

報 告 書 抄 録

ふりがな		あきゆういせき						
書名		阿久遺跡（第9次発掘調査）						
副書名		平成11年度 県営圃場整備事業原村西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		原村の埋蔵文化財						
シリーズ番号		56						
編著者名		櫻井 秀雄 平出 一治 角張 淳一						
編集機関		原村教育委員会						
所在地		〒391-0192 長野県諏訪郡原村6549番地1 TEL 0266-79-7930						
発行年月日		西暦 2003年03月						
所収遺跡	所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あきゆう 阿久	ながのけんすわぐん 長野県諏訪郡 はらむらかしわざ 原村 柏木	3637	11	35度 57分 37秒	138度 11分 38秒	19990419) 19991126	9,845.0	平成11年度県営圃 場整備事業原村西 部地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
阿久	集落跡	縄文時代	中期	5軒	中期土器、打製石 斧、磨製石斧、横刃 形石器、石匙、石棒 等	縄文時代	国史跡を取り巻く外縁部 の調査である。縄文時代 は、中期の集落址が露呈 した。前期との重複はな く、前期と中期では阿久 尾根の占有の違いが明ら かになり注目されるもの がある。	
		平安時代	後期	22軒	平安時代 土師器 坏・甕・羽 釜、須恵器、灰釉陶 器皿・碗・壺、刀子・ 鉄鏃		平安時代は、住居址を22 軒検出した。未だ詳細な 分析はしていないが、数 時期におよぶ集落址であ ろう。1基ではあるが、 墓壇の検出があり注目さ れるものである。	
		時代不詳	小竪穴	29基				
			配石	1				

調 査 組 織

平成11・12年度

事 務 局 原村教育委員会
教 育 長 大 舘 宏
学校教育課長 小林 銹晃
文化財係長 平出 一治
文化財係 中村 恵子

調査団

団 長 大 舘 宏
調査担当者 櫻井 秀雄 (平成11年度)
調 査 員 平出 一治
調査参加者 **平成11年度発掘作業**

池 冬樹	池 涼子	金子 正美	吉川 幸子	久根 種則
小池 英男	小池 寛司	小島久美子	小島 政雄	小林 りえ
小松 弘	五味 元	五味八代江	清水 太助	清水 正進
進藤 郁代	田中 初一	津金喜美子	西沢 寛人	日達今朝江
横内かおり				

平成11年度整理作業

池 冬樹	吉川 幸子	久根 種則	小島 政雄	小林 りえ
小松 弘	清水 太助	進藤 郁代	田中 初一	津金喜美子
西沢 寛人	日達今朝江	横内かおり		

平成12年度整理作業

小島 政雄	小松 弘	五味さゆり	清水 正進	田中 初一
西沢 寛人	横内かおり			

原村の埋蔵文化財56

阿久遺跡(第9次発掘調査)

平成11年度 県営圃場整備事業原村
西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成13年3月

発行 原村教育委員会

印刷 もえぎ企画書籍

